

北東インドでの学びと気づき

ー 伝統・アイデンティティと経済発展について ー

創価大学 経済学部経済学科

滝川 彩希

1. 「部族」というアイデンティティとの出会い

今回、北東インドを訪れて特に印象に残ったのは、「部族」という存在の大きさだった。

日本にも、かつては藩や地域ごとに異なる文化や生活習慣があり、現在でも都道府県や地域による違いはある。しかし、普段の生活の中で、自分がどの「部族」に属しているのかを強く意識することはあまりない。一方、ナガランドやメガラヤで出会った人々の話を聞いていると、自分がどの部族に属しているのかということが、その人のアイデンティティの重要な一部になっていることを感じた。メガラヤでは、カシ族など、異なる部族の人々が暮らしていることについても実際に話を聞いた。

最初は、「日本人」のように、人のアイデンティティには一つの大きな括りがあるものだと思っていた。しかし、現地で学生たちとアイデンティティについて話しているうちに、そう単純なものではないのではないかなと思うようになった。部族だけではなく、宗教や言語、地域、家族など、さまざまな要素が重なり合って、一人ひとりのアイデンティティが形成されているように感じた。

例えば、デリーにいたときに自分がどこから来たのかを説明するなら「北東インド」と答えるかもしれない。北東インドの中にいけば「メガラヤ」と答え、メガラヤの中にいけば、さらに自分の属する部族を答える。このように、自分という一人の人間の中に複数の属性・アイデンティティがあって、相手や発信する場面に応じて、そのうちどれを前面に出すかが変わると感じた。

今回の経験から、アイデンティティは一つのラベルではなく、複数の要素が重なり合っていてできているものなのではないかと考えるようになった。人間を分かりやすく理解するために、私たちは「日本人」「〇〇県民」「〇〇族」のように記号化しているだけで、本当はもっと複雑なものだと感じた。

土地との関わり方についても、印象に残ったことがある。日本では、土地は個人が所有するものだという感覚が当たり前になっている。しかし、メガラヤなどで話を聞いていると、土地はコミュニティや部族が共同で持っているものであるという感覚があることを知った。個人ではなく、コミュニティが土地を持つ。このことは、単なる土地制度の違いというより、その土地に生きる人々のアイデンティティのあり方そのものと深く結びついているのではないかと感じた。自分がどの土地に属しているかということが、そのまま自分がどの部族や共同体に属しているかということと重なっている。土地を「個人の財産」として切り離して考える日本的な感覚とは、根本的に違う土地との関係が、そこにはあるように思う。

2. 異なる文化をつなぐもの、そして変化していく文化

部族について話を聞く中で、宗教の存在も印象に残った。実際に話した学生からは、部族が違っていても、キリスト教徒であれば仲間意識を持つことがあるという話を聞いた。部族という強いアイデンティティがある一方で、宗教が異なる人々をつなぐ共通点にもなっていることが興味深かった。

一方で、メガラヤの教会では、カシ族とその他の民族で教会が分かれている場合もあると聞いた。つまり、「キリスト教」という共通点だけですべてが一つになるわけではなく、部族や言語などの違いも同時に存在している。それでも、ホームステイ先で出会った子どもたちは、自分とは異なる部族との境界を意識しながらも、その違いを尊重しているように見えた。

もう一つ強く印象に残ったのが、伝統文化の変化についてである。メガラヤのソラでは、地域の歴史や伝説が、文字ではなく人から人へと語り継がれてきたという話を現地で案内をしてくれた大学教員の方から聞いた。その方自身も、こうした口承伝承を保存する活動に関わっていた。しかし現在では、若い世代の中に、こうした地域の物語や歴史への関心が薄れているという話も聞いた。特に、ライスビールの文化や地域の言語、昔から語り継がれてきた物語について、その変化を考えさせられた。

もちろん、キリスト教の普及とともに学校教育や識字の機会が広がり、病院なども整備されることで、人々の生活に大きな変化がもたらされた。一方で、英語が広く使われるようになることで地域固有の言語が使われる機会が減ったり、キリスト教徒が増えることでライスビールを飲む文化が薄れたりすることもあるという。

教育や医療など多くの恩恵を受けられるようになる一方で、その過程で地域固有の文化が変化していくこともある。今回の訪問を通して、社会が変化していくときには、その両方を同時に見る必要があるのだと思った。

3. 経済的な自立について考えたこと

経済についても、今回の訪問を通して考えさせられることが多かった。

ナガランドでは、夕食を一緒に食べながら、コーヒーの起業家の方と懇談する機会があった。その方は政府への依存に対して強い問題意識を持っており、補助金だけに頼る経済のあり方は持続的ではないという考えを話してくれた。北東インドでは、州政府の予算が中央政府からの資金に大きく依存しているという構造があり、中央政府への財政依存と自主財源の不足が課題として示されていた。また、ナガランドでは公務員への就職志向が強く、民間企業の受け皿が十分ではないことも紹介されていた。

その起業家の方は、政府から補助金を受け取ることよりも、民間セクターが自分たちで稼ぐことが重要だと話していた。実際にその方は、政府の助成金に頼らず、自分で研究施設を立ち上げ、地域の土地を使ってコーヒーを生産し、独自のブランドとして価値を生み出そうとしていた。

この話を聞いて、経済発展というのは、単にお金の量が増えることではなく、誰が価値を生み出し、その利益がどこに向かうのかという問題でもあるのかもしれないと思った。北東インドには、コーヒーや織物、木材、スパイス、観光など、地域に根付いた資源がある。地域の人々が自分たちの資源や技術を使って、自分たちで価値を生み出し、その利益を地域に還元できるのであれば、それは経済的な自立だけでなく、文化を守ることにもつながるのではないかと思う。

この点で、土地の所有のあり方も経済発展と無関係ではないように思う。北東インドの一部では、土地がコミュニティや部族によって共同で管理・所有されている場合がある。これは、個人が自由に土地を売買したり、外部の資本に土地を切り売りしたりすることを難しくする一方で、特定の個人ではなく共同体全体に還元されやすい仕組みでもあるように思う。個人所有を前提とした近代的な経済発展のモデルをそのまま当てはめるのではなく、共同所有という土地のあり方を生かしながら、土地や地域資源から経済的な価値を生み出していく方法を探ることも、北東インドにとっての一つの選択肢なのかもしれない。

4. 「どのように発展するのか」という問い

今回の訪問を通して、私は「北東インドは、何を目指して経済成長していけば一番よいのだろう」と率直に考えるようになった。

日本は戦後、急速な経済成長を遂げた。そのため、日本の経験から学ぶべきことは多いと言われる。しかし、日本の近代化を振り返ると、経済成長や国家の近代化の過程で、それまで地域ごとに存在していた文化や言語、生活様式などが徐々に均質化していった側面もあるように思う。

特に、土地の所有のあり方という点でも、日本と北東インドの違いを考えさせられた。日本では、古代から土地の私有が認められてきた一方で、その所有や利用のあり方は時代とともに変化してきた。明治期には近代的な土地所有制度が整備され、土地の所有者が法的に明確にされるとともに、土地は売買や担保設定の対象となる個人の財産として位置づけられていった。

こうした土地所有の個人化・私有化は、日本の経済発展を支える制度的な基盤の一つになったと考えられる。土地が個人の資産として明確に位置づけられることで、土地を担保にした融資や、土地の売買を通じた資本の移動が可能になり、近代以降の経済活動を支える仕組みの一つとなった。

しかし同時に、土地の私有化・個人化が長い時間をかけて進んでいく中で、土地とコミュニティとの結びつきや、土地を介した人と人との関係も変化してきたのではないだろうか。北東インドで見た、コミュニティや部族が土地を共同で持つというあり方は、日本が長い歴史の中で土地の私有化・個人化を進める中で、次第に薄れていった土地との関係の一つなのかもしれない。

もし北東インドが、土地の所有のあり方も含めて日本と同じような道をそのまま進んだ場合、経済的には豊かになったとしても、その過程で部族ごとの文化や言語、地域のつながりが失われてしまう可能性はないだろうか。

もちろん、道路などのインフラが整備され、地域間の移動が便利になることは、人々の生活や経済活動にとって非常に重要なことである。山間部に道路を通し、人やモノをより大きな市場につなげることは、地域の経済的自立にもつながる。だからこそ、北東インドの経済発展を考えるときには、「どれだけ早く発展できるか」だけではなく、「何を残しながら発展するのか」という視点が重要なのではないかと思う。

今回の訪問で私が得た一番大きな学びは、「経済発展と文化をどう両立させるか」という答えそのものではない。むしろ、「その地域にとって、本当に望ましい発展とは何なのか」という問いを持つようになったことである。

5. 今回の訪問を終えて

今回、北東インドで過ごした時間を振り返ると、最初に抱いていた「経済発展」という言葉のイメージが少し変わった。産業や所得の伸びだけでなく、発展の先にある社会が地域の人々にとってどのようなものかということも、同じくらい重要だと感じたからである。特に印象に残っているのは、コーヒー起業家の方との会話と、ホームステイや学生との交流である。コーヒーの話からは、地域の土地や資源を活かしながら外の市場とつながろうとする姿が見えた一方、学生や地域の方との会話からは、部族や言語、宗教、伝統が今も人々の生活の中に息づいていることを知った。同じ「北東インド」という言葉でまとめられていても、その内側には多くの違いと重なりがある。だからこそ発展を考える際には、他の地域の成功例をそのまま当てはめるのではなく、すでに存在する文化やコミュニティを出発点にする必要があるのではないかと思う。インフラを整え外部の市場とつながることは重要だが、その結果として地域の文化やつながりが失われるのであれば、それが本当に望まれた発展なのかを問い直す必要がある。

今回の訪問を通して、私は北東インドについて詳しくなったというよりも、「簡単には理解できない」ということを知ったのだと思う。部族、宗教、言語、地域、世代など、さまざまな要素が重なり合って人々の生活が成り立っている。

最初は、この複雑さをそのまま受け止めればよいと考えていた。しかし「そのまま受け止める」という態度は、聞こえはよいものの、具体的な行動を伴わない姿勢だったのではないかと思う。複雑さを複雑さのまま認識しようとするだけでは、どの部分が自分にとって未知で、どの部分をすでに理解しているつもりになっているのかさえ判別できないからである。今回の訪問で必要だったのは、複雑さの前で立ち止まることなく、一つひとつの場面で質問を重ねて話を引き出し、部族、宗教、言語、地域、世代といった要素に分けながら具体的に記録し、分析していくことだったのだと思う。

もちろん、どれだけ分解し、細かく書き出しても、それだけで「北東インド」が分かるわけではない。言葉にしきれないものや、自分がまだ気づいていないものは必ず残る。それでも理解を疑い、聞き取りと記録を重ね、そのつど全体像を組み立て直していく。この反復こそが、複雑なものに向き合う際の実践的な姿勢なのだと考えるようになった。

この「分解して理解する」という営みは、今回見てきた「発展」やアイデンティティのあり方とも同じ構造を持っていると考えられる。土地の私有化や部族の区分も、この意味での「分解」の一例だと言える。

北東インドでは、土地がコミュニティや部族の共同所有として扱われてきた地域が多い。これに対し日本では、古代から土地の私有化が進み、明治期の地租改正によって近代的な土地所有制度が整備された。これは、共同体の中で曖昧に共有されていた土地を「誰のものか」という軸で線引きし、個人単位に分解する過程だったと言える。土地が個人の資産として明確に位置づけられ、担保や売買の対象となったことで、土地は日本の近代以降の経済発展を支える制度的基盤の一つとなった。その一方で、この過程で土地を介した地域コミュニティの結びつきや、共同体としての土地利用のあり方は縮小してきたと言える。

インドの指定部族(Scheduled Tribe)制度も、同様の構造を持つ。この制度は、複雑で多様な人間集団を「どの部族に属するか」という軸で線引きし、議席の留保、補助金、大学入試における座席の確保といった具体的な資源の配分と結びつけてきた。土地の私有化が土地を、指定部族制度が人間集団を、それぞれ一定の軸で切り分けたという点で、両者は同じ構造を持っている。つまり「分解」やラベル付けは、対象を理解するための便宜にとどまらず、価値や資源を特定の単位に割り当てるための制度的な道具としても機能してきたと言える。もちろん、この制度によって歴史的に不利な立場にあった集団への資源配分が実現してきた側面も見落とせない。分解やラベル付けは、それ自体が善悪を持つ行為ではなく、誰が、どのような目的と基準で線を引くのかによって、その意味合いが大きく変わるものだと言えるだろう。

私自身も、この報告書の中で同じことをしてきた。「部族」「宗教」「経済」「発展」といった見出しを立て、現地で聞いたことや感じたことを書き出そうとしたのは、根っこでは同じ営みである。書ききれていない部分も多く残るが、分かったつもりにならずに質問を重ね、書き出し続けようとしたことが、今回の訪問で得た一番の変化だったと思う。

まだ自分の理解は途中であり、今回見聞きしたことだけで北東インド全体を語ることはできない。それでも「この地域にとっての発展とは何なのだろうか」という問いを、以前よりずっと具体的な形で持つことができた。これからも大きな括りで分かったつもりにならず、細かく質問し、書き出し、そのうえでなお残るものに気づき続けたい。